

## 聖なる神

〔聖書〕 イザヤ書6章 1～11 節

ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。彼らは互いに呼び交わし、唱えた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た。」するとセラフィムの一ひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火を触れさせて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れたので／あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだらうか。」わたしは言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」主は言われた。「行け、この民に言うがよい／よく聞け、しかし理解するな／よく見よ、しかし悟るな、と。この民の心をかたくなにし／耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく／その心で理解することなく／悔い改めていやされることのないために。」わたしは言った。「主よ、いつまででしょうか。」主は答えられた。「町々が崩れ去って、住む者もなく／家々には人影もなく／大地が荒廃して崩れ去るときまで。」

### 〔序〕 旧約聖書と新約聖書をつなぐ預言者

キリスト教信仰はユダヤ教から生まれました。旧約聖書と新約聖書を併せて信仰の規範・正典としていますが、ユダヤ教は旧約聖書のみを正典としています。旧約聖書は救い主メシアを、来たりたもうお方と待ち望む未来形或いは約束として記しています。ですからユダヤ教の人々は今なお、メシアの来臨を待ち望んでいます。

一方新約聖書は「そのメシアがナザレのイエスとなって来たりたもうた」と完了形で記しています。そしてイエスこそ、イスラエルの民が待望してきたキリスト(メシア)であることを示す旧約聖書の記述を、沢山引用しています。特にイザヤの言葉を一番多く引用しています。ですからイザヤは、旧約聖書と新約聖書をつなぐ最も重要な預言者だと言えましょう。新約聖書が真っ先に引用しているのもイザヤの預言です。

このように大事な預言を次々と新約聖書で用いられているイザヤは、BC731年頃預言者として神さまに召されました。20才頃でしょうか。そして約40年余の間南王国ユダの都エルサレムで預言活動をした後に沈黙し、80才頃に殉教の死を遂げたと言われています。彼は国王と会って話が出来る貴族の一人でした。ちなみに日本書紀によりますと、日本の初代神武天皇はBC660年に即位したとありますから、神武天皇以前の人物です。そのような昔の人の言葉が、今日もなお私たちに大きな影響を与えているのです。不思議ですね。

## [1] 預言者が生まれた時代的背景

私たちは先週まで4ヶ月間、旧約聖書の最初の書創世記を学びました。イスラエルの始祖アブラハムは神の導きに従ってメソポタミア地方から、ずっと南のカナン地方に移り、三代目のヤコブは晩年に大飢饉を逃れてエジプトに移住しました。ここで創世記は終わりました。

ヤコブ一族を中心にイスラエルの民は約 400 年エジプトに留まりました。しかしエジプト王朝の変化によって、イスラエルの民は奴隷扱いを受けるようになりました。そこでBC1290 年頃にモーセの指導の下にエジプトを脱出し、12 部族がカナン全域に戻って来てそれぞれ定住しました。そしてBC1000 年にダビデによる統一王国が誕生しました。

しかしダビデの子ソロモンが死ぬと分裂して、北10部族はサマリアを都に北王国をつくり、エルサレムは南王国の都となりました。北王国は 200 年後にアッシリアによって滅ぼされ、南王国は335 年後にバビロンによって滅ぼされ、以後は大国の属国として、世界史のなかに名を留めます。これがイエス・キリスト誕生に至るまでの、神の民イスラエルの歴史の概略です。

この分裂王国時代に預言者が活躍しました。北王国では、869 年のアハブ王時代からエリヤ、エリシャが、786 年のヤラベアム王時代以後はアモス、ホセアが、南王国では 731 年ウジヤ王の死後からイザヤ、ミカ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルなどが次々と神の言葉を語りました。どうしてこの時代に預言者が輩出したのでしょうか。やがて北王国が、そして南王国が滅んでいくのです。それは神の御心に背いたための神の裁きにほかなりません。そうならないようにと、神は預言者を次々とお立てになって警告された——それが預言者の活躍だったのでした。

## [2] 神の臨在にふれる

今日の聖書の書き出しは「ウジヤ王が死んだ年のことである」。ウジヤは父アマツヤが北王国と戦って徹底的に打ちのめされた後を受けて、16 才で王になりました。紀元前 783 年のことです。彼は井戸を掘り、農業を振興させて豊かさを取り戻し、見事に国を再建しました。軍備を増強して近隣諸国との戦いに 勝利をおさめ、貢物を次々と献上させました。ところがやがておごりたかぶり、神殿で礼拝を捧げる際に、祭司に代わって香をたこうとしたのです。たちまち神の怒りにふれ重い皮膚病になってしまいました。人前に出ることが出来ない ので、息子ヨタムを摂政にして王位を保ちました。 在位 52 年間、とにかく強力な指導者が死にました。厳しい国際情勢の中で、小さい国の将来はどうなるでしょうか。青年イザヤは貴族の一員として、神の厳しい怒りにふれて重い皮膚病になったウジヤ王の姿を目の当たりにしました。 国が豊かになったとはいえ、それは支配階級のことであり、弱い民衆は貧しさにあえいでいます。神殿には金持ちたちの豪華な捧げ物がささげられ、祭は盛大に行われていますが、道徳的荒廃が広まっています。貴族の一員として自分はどのように国家に対する責任を果たしていくべきか。イザヤは神殿で祈り続けていたようです。BC731 年頃のことでした。

イザヤは突然「高く天にある御座に主が座しておられるのを見た」という経験をしました。でも見たといっても神がどんなお姿なのかについては、彼は何も述べていません。神の衣のすそが神殿いっぱい広がっていたと述べているだけです。彼が見たのは神のお姿ではなくて、衣のすそに過ぎなかったのです。それでもイザヤは神を見たと言い切っています。

そして彼はセラフィム(天使でしょう)たちが歌う讚美歌を聞きました。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」。呼び交わす賛美によって神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされると彼は述べています。彼は天使の讚美歌を耳で聞きました。神殿の入り口の敷居が揺れ動くのを体で感じました。同時に神殿が煙で満たされるのを、目と鼻で確認しました。イザヤは自分の目や耳や鼻や皮膚や身体全体で主なる神を見たという体験をしたのです。これは「神を見た」というよりは「神の臨在にふれた」と言った方が分かりやすいでしょう。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」。「聖」という字は「ひじり」と読み、儒教では「徳の最もすぐれた人」を意味します。「神聖」とは「清らかで汚れがなく、たいそう尊いこと」を指します。また一般的には「道を究めた第一人者」を楽聖とか剣聖と言います。私たちは天皇を神と崇める教育を受けましたが、当時の日本では天皇を「聖上」と言いました。一切のものの上に在り何のものにも犯されない方と崇めたのです。ところで旧約聖書のヘブル語では、聖は「分ける」「分離」を意味する語です。ですから「聖なる神」とは、「私たち人間や他の一切とは全く質の異なるお方」という信仰の言葉と言えましょう。

ですから神を見るという時、人間や動物、或いは山や海や空を見るのとは違うのは当然です。それでイザヤは「主なる神を見た」といいながら、私が「神の臨在にふれた」と言い直したような述べ方しか出来なかったのです。

私たちはTVの画像を見るようには神を見、TVの音声をきくように神の声を聞くことは出来ません。でもイザヤが体験したように、神が私たちの体に備えて下さっているいろいろな働きを通して、神の存在に触れ、御心を感じ、その思いを知り、神の意志と計画を聞き取ることが出来ることを、イザヤは教えてくれているのです。

### [3] わたしは滅ぼされる

イザヤが聖なる神を見た時、すなわち聖なる神の臨在にふれた時に、とても大切な経験をしています。5節をご覧ください。彼は思わずこう叫びました。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に 住む者。しかも、わたしの目は、王なる万軍の主を仰ぎ見た」。汚れた唇の者とは「心の中からの汚れた言葉が口から出て来る罪深い者」という意味でしょう。そして彼は自分が、自分自身の罪深さのゆえに滅んでしまうという思いに襲われて、震え上ってしまったのです。

ウ ज्या王は一応南王国を近隣諸国よりは強くて繁栄した国にしました。しかしその繁栄は社会に

道徳的な腐敗墮落をもたらしました。北にアッシリア、南にエジプトという大国にはさまれて、小さな国がこれからどう生き延びて行けるでしょうか。イザヤは貴族の一人として、信仰に立って人々を教え導かなければならないという自負心、自信また正義感を抱いていたに違いありません。

彼は、人前をはばかりの体になってしまったウジヤ王を身近に知っています。おごりたかぶることが神の怒りをかうという恐ろしさを、痛感させられてきたはずです。ですから自分はよくよく神の御心に聞き従って生きていかねばならないと、自戒していたに違いありません。その彼が「聖なる神」の臨在に触れた時に、自分の唇の汚れを痛切に自覚させられたのでした。

彼は社会の腐敗墮落を見て、人々に悔い改めを迫っていかねばならないとの思いを抱いていました。しかし人々が皆唇の汚れた者であるならば、その中の一人である自分だけは唇が清いなどと言えるでしょうか。自分もまた同様に唇の汚れた者ではないのか。そこで「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者」という告白に続けて「汚れた唇の民の中に住む者」という自覚が告白されたのではないのでしょうか。

聖なる神の臨在にふれる時に、私たちも自分自身の罪深さをはっきりと示されます。そしてそれがまた、自分が身を置く社会の罪深さをも自分の事柄として自覚させてくれるのです。イザヤはこうして自分の中に気付かずに抱いていた自負心や自信や正義感を打ち砕かれて、徹底的に謙遜にさせられたのでした。

するとセラフィムが犠牲の供え物を焼く祭壇の炭火を火ばさみにつまんで、イザヤの口に当てて言いました。「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された」。神は自分の汚れを自覚したイザヤに、神の火、聖なる霊をもって汚れを清めて下さいました。

すると神の御声が聞こえてきました。「誰を遣わすべきか」。「わたしがここに おります。わたしを遣わしてください」。神はイザヤを罪赦された預言者として立たせて下さったのでした。

イザヤは後に、こう預言しています。「高くあがめられて永遠にいまし、その名を聖と唱えられる方がこう言われる。わたしは、高く聖なる所に住み、打ち砕かれてへりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる」(イザヤ 57:15)。

聖なる神は、自分の罪、汚れを自覚させられて震えおののくイザヤを、聖なる火をもって、焼き清めて下さいました。そして神の御用に用いて下さいました。罪を赦し、清めてくださる恵み。神の御用を与えられる恵み。いと高く聖なる神が、打ち砕かれてへりくだった者、心を低くされた者の所に降ってきて寄り添って下さり、豊かな神の命を与えて働かせて下さるといふ信仰です。

これは何という素晴らしい恵みでしょうか。私たちの世界では、高い者が良い物を手に入れます。し

かし神の世界では、低い者が用いられて、豊かな命をいただけるのです。神は私たちとは全く質が違い、全てから超越しておられます。私が多少自信を持ち、何かやれそうだと思っても、神の前に立つと、先ず自分が持ち合わせている自信や自負心が、徹底的に打ち砕かれてしまいます。その上で罪の汚れを清めて下さり、神の御用に用いて下さる。そういう神をイザヤは聖なる神と表現したのでした。

### [結] 聖なる神を信じて生きる

私たち日本人の宗教心は、鎌倉時代の歌人西行法師が伊勢神宮で詠んだ歌が端的に表しています。「なにごとの おはしますかは しらねども かたじけなさに 涙こぼるる」。五十鈴川で口と手をすすいで、杉の木立の中の拝殿にただずむと、どのような方がいらっしゃるかはおわかりませんが、もったいないという思いがしてきて、涙が自然に出てきたという心を詠い上げたものです。神がどのようなお方であるかが、はっきりしていません。ただただ「もったいなさ、有難さ、涙があふれ出てくる心境をもたらす何ものか」なのですね。

イザヤも神のお姿を自分の目ではっきりと見ることはできませんでした。しかし聖なる神の臨在にふれた時、彼は「私は滅びる。汚れた唇の者だ」と震えおののきました。貴族という身分に安住し、その特権に慣れてしまう悪を断ち切る聖なる神の声を聞いたのです。そして内なる罪深さを清めて、使命を与えて、送り出してくださる神との出会いをはっきりと体験しています。そしてこの聖なる神を信じて、与えられた使命に用いられていく信仰を、生涯かけて証し続けたのでした。

私も恩師熊野牧師から、謙遜になれ、謙遜になれと繰り返し教えられて育ちました。私たちは、聖なる神の前に常にわが身を置いて、自分の罪深さを自覚させられ、赦しと清めをいただかなければなりません。そしてへりくだった低い心を与えられて、神の御用に用いられる生涯を送ってきたいものです。

お祈りします。聖なる神さま イザヤは聖なる神さまのご臨在にふれて、己の罪深さにおののきました。私たちも今貴方を礼拝しております。私たちも聖なる神さまの御前にひれ伏すことによって、己の罪深さに恐れおののく者にして下さい。そしてへりくだった低い心をもって、貴方から示され、与えられる私の役割り、私の為すべき仕事を受けとり、行う者にして下さいますよう お願いいたします。この祈りを、救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 アーメン